

卒業論文：「結婚とその満足度の決定要因の分析」

経済学部4年、2106071b、菊田祐介

要旨

この論文は、既婚者と未婚者の差、配偶者との関係の満足度の差を分析したものである。

仮説として、「学歴が高く、大企業、無宗教、長男でない、喫煙をしない男性の方が、そうでない男性よりも結婚している」、「女性は男性に比べて、学歴や兄弟姉妹数による影響は小さいが、父親の職業が高いほうが、そうでない女性より結婚している」、「田舎に住んでいる人のほうが、古い規範意識を持っているため、都会に住んでいる人より結婚している」、「男女共に、結婚していることにつながる要素が多く持っていたほうが、配偶者との関係の満足度が高い」、の四つをたてた。

分析手法としては、JGSSのデータを2000～2006年度まで連結し（抜けている年度あり）、結婚、配偶者との関係の幸福度（既婚者のみ）、年齢、兄弟姉妹数、教育年数、初職の会社規模、15歳の居住都市規模、15歳時の父親の職業、15歳時の父親の会社規模、15歳時の母親の職業、父親の教育年数、母親の教育年数、宗教の有無、飲酒頻度、喫煙頻度、夫婦関係の幸福度（既婚者のみ）、を抽出した。そして、既婚者と未婚者を、「年齢、兄弟姉妹数、教育年数、初職の会社規模、15歳の居住都市規模、15歳時の父親の職業、15歳時の父親の会社規模、15歳時の母親の職業、父親の教育年数、母親の教育年数、宗教の有無、飲酒頻度、喫煙の有無」を説明変数に Dprobit 分析した。さらに、配偶者との幸福度についても同じ説明変数で Heckmanprobit 分析を行った。

結果は、①既婚者と未婚者の比較については、男性は教育年数が結婚にプラスに影響するが、女性の場合はマイナスに影響する可能性が高く、男女間で差が生じた。初職の就業規模については、男女共に結婚にプラスに影響する結果となった。男性の場合は15歳の居住地の人口が結婚にマイナスに影響することが判明した。一方、②配偶者との関係の満足度に関しては、男性の場合は飲酒がプラス、喫煙がマイナスに、女性の場合は年齢、年上の姉の数、母親の教育年数、宗教等がプラスに、それぞれ影響することがわかった。